退任記念講演

追憶

光地英学

このような講演を私の退任の挨拶として行うことは辞退したのでしたが、元仏教学部長の松本皓一先生発起に依る学部の基本姿勢であり、通過儀礼であるとの要請でありまして、恐縮の念に充ちて諒承せざるを得なかった次第です。現学部長岡部先生はじめ関係役員各先生方のご慈配に対し、幾重にも御礼を申し上げます。私の話は、学生時代、修道・教員・私の仏教、本学への希望というこの四点から申し述べたいと思います。

(一) 学生時代

まず学生時代を顧みます。本学の教員歴は四十七年という永きに渉っていますが、思い出の今に尚鮮やかなのは本学の学生時代であります。学部の二年の時、それは昭和九年で、その年私は、仏教学科の学生全員で構成して居りました仏教学会の理事をして居りました。その折、三つの印象深いことがありました。一つは、釈尊降誕二千五百年の記念行事を仏教学科が主体となって行ったことです。その行事の主たるものは記念法要と、当時の仏教学の泰斗高楠順次郎博士を招聘しての記念大講演会、及び仏教学科所属全教員執筆に成る記念特輯号（駒沢大学学報第五巻之二）であります。一つは所謂の大学騒動で、一流新聞が血の雨を降らしたという程のものであったのです。それは、不本意にも大学幹部を辞めさせられた方々と、その人からみて、自分を本学から追い出したという恨みを投げかけられた当時の大学の幹部との問題で、退任した方が現幹部排斥を、同窓会の一部と運動部学生、更に当時ありました陸軍省派遣の大学配属の軍人との連携のもとに行った根深い計画に発したものでありました。私が仏教学会の役員という立場もあって、大学幹部擁護に立って同志十数名と決起、この問題の処理に当りましたが、同志が血判を押しての運動であった訳です。結果は幹部排斥は成らず、我々同志の念願が達成されたのでしたが、それに至る経路は省略致します。三つ目は汎太平洋仏教青年大

会のことです。やはり私の学部二年の時に行われました。この大会は第一回がハワイ、第二回目が日本で、太平洋岸の十三ヵ国の青年仏教徒に依る大会で、多分四年毎にということではなかったかと思って居ります。日本での大会の場所は東京、京都、比叡山、大阪、高野山、広島と、順次会場を移すのでした。その議題の攻究は東京で、他は単なる観光懇親の会という程度のことでありました。本学からは準備委員五名、代表委員二名が選出され、当大会に出席、提案、討議を行います。この両委員何れにも私が選出されました。この時の本学の委員は洵に意気熾んでありました。当時、旧制の大学で仏教青年会のありましたのは、東京では東大、早大、慶大あたりであったと思います。勿論本学の他、大正・立正、それに智山専門（後に大正大学に合併）等は、大学ぐるみの仏教青年会であった訳です。本学委員の意気軒昂というのは、他大学の仏教青年会に働きかけまして、銀座での懇親会を本学委員が主催したことでした。又、東京から京都に各国仏青の為の特別列車が出ましたが、日本の仏青の要望もありまして、日本の仏青として大会出席の外国の仏青に対してメッセージを出すことになりましたが、この特別列車の車中で私が文案を起草し、当時、米国から竜谷大学に留学していました二世が英文に翻訳して配布したことでした。この時の準備委員の一人に本多義雄という人が居りましたが、この君は、これから触れます他の二人と共に、私として忘れ難い親友ともいうべき人でありました。この当時は軍国主義の声の高い時でありましたが、本学と国学院大学との二校が発起し、全国の大学高等学校専門学校に激をとばし、全国大学高専号としての軍用機を陸軍と海軍に各一機づつ献納しました。その時の本学のこの運動の主役が本多君であったのです。この君は九州佐賀の人で柔道の猛者（当時としての四段）でした。さてこの二機をいよいよ軍に引き渡す時の式が当時の代々木練兵場で行われたのですが、各出資した大学から献納式の代表を選ばねばならない、代表とは大学の学長・総長がその任に当る訳です。その代表校を選ぶ会が各大学から学生委員が出て決定することになっていましたが、この会合の議長が本多君であったのです。各大学の委員諸君は是非とも自分の大学の学長を代表として選出するようにと念じていた訳です。本多君もその例に漏れず強い念願で、予め知りあいの明治大学の委員に、当時駒沢大学々長であられた大森禅戒という名の発言を強く要望しておいたのでした。いよいよ会議開催、議長本多君が開会を宣して代表者選出に入りました。各自、己が大学の学長なり総長なりの名を推挙する。然し議長の本多君は黙するのみ。そのうちに明大の委員が挙手、すかさず「ハイ」と議長が応じ指名する。「駒沢大学学長大森禅戒」と申すや、「よし、それで決定」と断を下した。すると俄然、議場は騒

然、「議長横暴、今まで我々が色々推挙しているのに何ら取り挙げることなく、君の大学の学長名が出るや直ちに採択するとは何事ぞ」という。本多君は「議長の権限である。それで尚文句があればこの会の終了後、体で決裁しよう」と大見栄を切った。各々は本多君の柔道の偉力を知っていたからでしょうか、事無きを得たのです。本多君は大森学長に、代表として挨拶するに至ったことを概説、よろしくと依頼。学長は献納式の当日、代々木原頭で献納校代表として挨拶し終るや、くるりと飛行機の方を向いて声高らかに法語を唱え、最後に一段と声を張り上げて「露」という大声を以て閉じたことは、禅の大学の学長として洵に面目躍如たるものがあった。これらはラジオ放送として内外に宣布されたことでありました。この本多君も卒業後、佐世保重砲兵聯隊に入り、重砲兵の隊長としてノモンハンでソ連の戦車群と交戦、壮烈な戦死を遂げました。話は多少前後しますが、この時代は現在と違い軍国調華やかな時でありました。全国の大学、専門学校の学生で愛国学生連盟というものが作られていた。本多君はその総指揮をとった人物で、新聞にも報道されていた。軍国調というものが当時の本学にも強く浸透していましたことの一例として、九段の軍人会館（現在の武道館の近く）で駒大の名に於いて皇国思想昂揚の一大講演会が盛大に行われた。我々学生は講演の内容などはどうでもよいので、拍手喝采して会場の空気を盛りあげることのみに懸命であった。講師は、当時の政界にての一大雄弁家、永井竜太郎氏であったが、同氏は「宗教なき労働と労働なき宗教」という題目のもとに熱弁を振るわれたことである。それに仏教界の大雄弁家の加藤吐堂居士、宗教学の大家、宇野円空博士の諸講演であった。その時のポスターは大変振（ふる）っていた。それは手力男命（たじからおのみこと）が天（あま）の岩戸（いわと）を開くとそこに燦然たる光明が射（さ）し、その光りの中に本学の本館（現在の記念講堂のある所に建っていた中心的建物）が描かれているという、勿論カラーの大きなものであった。それを画いたのは私の同級の今堀君で、やはり同級の、小錦関の兄と云わんまでも弟分程度の堂々たる友人がいて、それを裸体にし、手力男命のモデルとして描いたものでした。今堀君がそのような素人離れた画才の持主でしたが、惜しくも太平洋戦争で戦死したことは、本多君同様、惜しまれて余りあることです。

本多君の他に、当時の異色ある友人に僧籍に在った鈴木久学という人が居ました。この君は仏教学科・人文学科・東洋学科とあるうちの人文学科出身で、法律の勉強をし、高等文官試験に合格、検事になった人で、本学卒業生としては異色の人、特筆に値いする人材でした。私の記憶に間違いがなければ、曽て東北、平の列車転覆事件に、主席論告検事として鈴木君が新聞に名を列ねた筈でした。検事を終えた後、弁護

士を開業、惜しくも昨年福島の自坊で遷化、駒大出身の真面目そのものの如き特筆すべき逸材でありました。

これまで二人の友人を挙げて参りましたが、最後は九州福岡県の渡辺俊三君についてです。同君は本多君と同じ東洋学科出身ですが、本多君が柔道の猛者であったのに対して劍道の達人でした。私は同名と幾度も劍を交えたのでしたが、実に鋭い劍捌きでした。この君は本学の卒業後、当時の斯界で最高ともいうべき練士となったが、全九州の同練士（六段以上）十八人のうち優勝した程の達人ぶりであった。同君についてなお特記したいことは、寺院住職であるとともに神官でもあったという点で、このことは写真入りで「朝日グラフ」に紹介されたことでもありました。同君も昨年、化を他界に移しましたが、その時の遺偈は実に見事というべく、次の如くであります。「剣に生き仏の慈悲に護られて心残さず帰る古里」。

（二）修道・教員　修道と教員という、まことにセットにもならない項目ですが、先ず修道について申し述べます。修道ということでは、読経の功徳と坐禅についてのささやかな体験に触れたいと思います。先ず読経の功徳ですが、本学卒業後、宗門研究生として研究に従事していた時でした。その折、体がだるく寝汗が出るので病院に診断を乞うたところ、レントゲン検査の結果、肺が犯されているから絶対安静とのことです。廿代前期の、気持だけは元気な時代の私でしたので、その時落込まないで、闘病策ともして三つのことを自らに誓ったのでした。一は暇さえあれば読経する、一は規則正しい生活をする、一は絶対に薬餌（やくじ）療法をしないということで、半年の期間にと心に決めた訳です。半年後、同病院でレントゲン検査の結果、すっかり治癒しているとのこと、その痕跡は勿論現在、はつきり残って居ります。その当時は自分の少々の熱や近親者の病気、それも医師の注射で痛みの去らないところを読経主体の接手療法で効を奏したこともありましたが、そのような治療力はその場限りで継続的威力ではなかったのです。その代りといっては妥当でないのでしょうが、それよりかなり後になって、坐禅の効というところに心の華が開いたように思われます。

私の坐禅ですが、本学の学生時代には、現在のような必須課目として授業に組込んだ坐禅もなく、坐堂も参禅会もなかったのでした。尤も授業の密度は頗る高いことでしたが。私は予科の時から、禅学の教授であられた岡田宜法先生を煩わして参禅会を発起し、毎週坐禅に励んだのでした。学校以外でも縁を求めて参禅会に出席、時には断食坐禅も敢為したりしました。卒業後、一時、井頭公園に現在もありますが、武蔵野般若道場に入り、釈　定光老師とその高弟苧坂（おざか）光龍居士に就いて参禅しました。ここは行持綿密、言動極めて温和鄭

重で、曹洞の家風の模範とも云うべきものでした。ただ曹洞禅と異る点は、公案禅であったことのみでした。私は趙州無字の公案を工夫、約三ヶ月で見性を許されました。永平寺の故秦　慧玉禅師も定光老漢について参禅しておられました。見性後、幾つかの公案を通過はしましたが、曹洞黙照禅のことを自省するに至り、当道場を後にしました。秦禅師については、大事了畢されたか否か不明ではありますが、相当以上にも深く公案参究を続けていられたことでした。

公案禅を止めた後、私として坐禅の境地に一大転換を将来する、そのようなことになりました。私をして坐禅の一大飛躍をなさしめたのは、心の上の測り知り得ない苦悩が基盤をなしていた。それはある寺院の住職問題を中心としての波紋でありました。その折の心の状態をいうならば、まともの心でもなく、それかといって狂っている心というのでもなく、その正と反の間の紙一重のところに、何時果てるとも知れない孤独の悩みを耐え忍び己が胸中に秘して、他言しないばかりか、顔では笑うといふ、これが私の死の苦しみであり、又、心の修行であったのです。この折、読経と特別の修法を毎日継続して、約半年位経過しました。忘れもしません四月十二日の拙寺薬師如来の春の祭典の晩、自室のお内仏前で夜を徹して打坐していた時、急に坐禅の境地が開けました。それは次のようなことであります。私と縁の深いみ仏に、仏母孔雀明王尊というお方が居られます。このみ仏は何れかといえば密教系の如来で、高野山・御室仁和寺・大和の菩提山正暦寺等に奉安されている明王です。この如来は、いう如く孔雀に乗っておられます。孔雀は、毒を食しても毒に害せられない、寧ろ毒を変じて薬となすという、所謂、煩悩を菩提にする力用のあることのシンボルと思われている鳥ですが、定中、その明王が羽撃(はばた)いている孔雀に乗って私の方に向って飛んでくるのが見られたのです。坐禅中、自己の心眼に映じたのは、これが最初のことでした。それまでは全く所謂無我夢中の坐禅で、定中に何ぞ映るなどということはなかったのです。私は定中で、「孔雀明王尊、何れに向って飛び給うや」と問うと、明王は「我は汝の心中に向って飛んでいるのである」と仰せられた。出定後のことですが、このことで私は、不動明王が信者の心中に住み給うという不動明王の経文（聖不動経）の意味が理解できたことであります。この時のような坐禅を止と観に対応させると、止は三昧で空であり体である。観は止より発する正見であり有であり、慧であり用であるということになります。止観の観には二面がある、一は定外で正しく物を見るという生活上の働きであり、一は定中の正しい如実の観察であります。定中の観については、天台で説くところであり、又「瑜伽師地論」などに説示しているところでもある。なおこのことについて、「法華経」安楽行品

の「深入禅定、見十方仏」の語があることは周知のことであります。この定中の体認があってから、定中でのみ仏の拝見、つまり見仏が可能となりました。見仏ではありませんが、先年物故された本学の経済学部の創立当初からの教授であり、経済学部長でもあられた吉沢文男先生が、逝去される前、私の定中に来現、今生の別れの挨拶をされたことも敢えて付言したいと存じます。

次の教育についての追憶の若干に触れたいと思います。教員ということですが、教員就任以前の若干を顧みます。本学卒業後、前述の如く択ばれて宗門の研究生となり、研究に従事しましたが、研究生同志で学士会という会を作り、研究発表などを為して盛んに研究に励みました。又、本学の学士会が発起し、大正・立正・智山専門の三仏教系大学に働きかけて、東都仏教大学研究連盟を結成、親睦をかねた相互の研究交流を図ったのもその頃のことでした。この時の本学当会の中心ともいうべき人が教授の増永霊鳳先生でありましたが、有力会員のうちに後の宗務総長岡田己成師も居られたことでした。私は昭和十三年頃、寄宿舎の舎監（寮監）をしばらく致しておりましたが、その時の舎生中の役員に市川清矩（きよのり）君が居りました。この君は後、地方の名士となったり、宗門にても宗会議長に任ぜられたりでしたが、惜しくも先年遷化せられたのでした。このような活躍者なり有為の人物は市川君に止まっている訳ではなく、ただその代表者の一人として名を出したに過ぎません。本学の講師に就任したのは昭和十六年でしたが、わが国が大東亜戦争に突入、次第に熾烈さを加えてくるようになり、学徒勤労動員が施行せられ、本学学生も軍需工場に挺身せざるを得ないことになりました。私も川崎の古川飛行機工場に学生を引率して参りましたが、十分（じっぷん）の休憩時間に学生を集めて講義をし、その断片的講義の集約を以て試験ということでした。かかる授業の中でも、学徒に軍からの召集があり、櫛の歯の次第に欠けてゆく状態でした。そのうちにかく申す私が応召ということになりました。それ迄は丙種で軍隊などには全く役立たないというレッテルの張られた身分でしたが、二階級躍進で一度に甲種になったのではなく、そうさせられたのです。しかも大隊砲という大砲を扱う初年兵として朝鮮平壌で真夏三ヶ月間猛訓練を受けさせられました。大砲という力の要するこの種の軍隊で、非力の自分如きものの労苦は並大抵ではなかったのでしたが、身は僧侶であり、駒大の教員であるとの自覚を以て努力したことでした。

講義のうちで、講ずる者と受ける者と、諧調し難い課目を強いて挙げるならば、宗教学であろうと思われる。全学に渉っている宗教学の講義について、当初は、一年が宗教、次いで上級学年に進むに従って、仏教・禅一般・曹洞禅という編

成で、一年から四年迄の講義であった。経済学部の前身が商経学部であったが、その商経学部といった時代、四年生の曹洞禅の講義は免角騒ぐというので、円熟した教授方の忌避するところとなり、当時少壮の私に是非出講するようにとの要請があり、その厳命拒み難く、未熟の私が出講、その折は毎時間、全身心を挙しての講義を試みた。講義内容より横溢する意気に感応したのでしょうか、毎時間の終りには受講学生一同が拍手してくれたことは、今になお感銘深く印象に残っていることであります。その時から随分年月が経過、今から数年位前のことでしたが、それとは別の意味で、やはり宗教学の講義で印象を止めているのがあります。それは短大国文科生の講義でした。この女子学生は出席率は頗るよいのですが、困ったことにお喋りが過ぎるというもなお愚かなりと申したい程でした。広い教場の片方の騒ぎを注意していると、他の一方が騒ぎ、それを注意していると又、他のところがということで、私の方が根気負けという状態でした。致し方なくボールド一面に講義要領を書き、それをノートに写し記載し終えたら座談会をしなさいと、私の方から提言した程でした。私としては試験は厳重にして、日頃の各自の受講態度に対応するのに容赦することのない採点で臨んだのでした。ところが答案をみて再度びっくり、と申しますのは、何れも優秀な答案で二百人以上全員優、一人のみ良という。かかることは私の長い教員生活で始めてのこと、と申しますのは、騒いだこと、それに反して試験成績が挙ってすばらしいということです。選抜されての優秀な入学者、そして熱ある試験勉強ということでもありましょうか。

(三) 私の仏教

およそ死というものがなかったならば、宗教の必要はないと思われます。孔子は、「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんや」と云っています。現世の人間の行為のみならば、倫理道徳でよろしいように思われます。尤も心の問題がありますが、然し死があるから、心の堀り下げが問われることと云わねばなりません。

ここに霊の問題がでて参ります。霊魂は下意識（潜在意識）も、知情意の働きをも含んだ心の統一体で、過現未の三時、過去世・現在世・未来世の三世を通貫した個性を持った意識で、真実の我であります。我々の肉体が多くの細胞の結合に依って成り立っていますが、その細胞は常に新陳代謝し、一刻も同じ態ではなく変化しながら一の身体を持続して居ります。心も同様で常に流動しながら、個性を存続している。霊も流れる水の如く常に変化しながらもそこに一貫した主体的存続があり、個性がある。これらについては、犢子部等の補特伽羅説があります。即ち経験により、常に変化しながら存続する業力にて、今生から次生に至る主体である。これが種子・現行・蔵識の関係を擁んだ阿羅耶識説へと展開してい

る。流動のすがたを「解深密経」第一巻に、「一切種子如二瀑流一」と云っている。今生の五蘊は来生の五蘊と業力で連続する。（業報の問題については、なお私見があるが割愛します）。

衆生は有漏業であるのに対し、諸仏は無漏業であります。流動の相に於いて霊があるが、この霊を諸仏にしては諸仏の実在となり、諸仏のまします土としては、仏土の実在となります。

諸仏の実在を観る方法に、禅定（止観）三昧と、観仏三昧・念仏三昧があります。観仏三昧については、般舟三昧経・観無量寿経等があります。念仏三昧は口称三昧です。法然上人等の為さったところのものです。これは三昧によって諸仏の実在を確かめる、つまり見仏ということです。見仏のような証（あかし）について、W・ジェームスは、その『宗教的経験の諸相』下巻（岩波文庫本）にて、次のように云って居ります。

「現前の感じのほうが、どれほど漠然としていようとも、概念などよりも無限に強力なのである。概念はどんなに強力なものであっても、幻覚の明証力には、とうてい比肩しうるものでない」。又浄土真宗の碩学、花田凌雲和上は「宗学院論輯」第卅二輯で、「見仏は信心増長の良縁として、これ程尊い事は無い」と述べていられます。」六十華厳経」第七巻にも、「念仏三昧にて、必ず見仏す」とあります。廬山の劉遺民が、坐禅半年にして定中に見仏したことが、「広弘明集（こうぐみょう）」第廿七にみられます。この定中見仏については、前の坐禅のところでの体験で触れたことでもあります。

私は人生の終着駅が、み仏のまします浄土であり、その浄土に往生することを以て、人生の目的としたいと思います。ところが現代の人は、この世のことが主であり、霊を認めようとせず、来世のことに関心がない。信じようともしない、それを以て、如何にも知識人であるかの如く思い誤っている。「法句経」八五に、この点「人間の中、彼岸（涅槃）に到達する人は鮮し、此方（生死界）にある他の衆生は、ただ岸に沿って走るのみ」と示している。人は、平常時、事無き時は、洵に大言壮語する。ところが非常の数に、果してそのように云い得られるか、戦時中の食料難の時など、そのようなことを現実に見聞したことである。人間は要するに弱い存在である。先ず、環境に支配される。この点、客観界の力を考えてみたい。この意味からも、浄土往生を強調したいと思います。

浄土とは弥陀の極楽浄土であります。弥陀と浄土、特に阿弥陀仏についてのささやかな体験を申したい。かなり以前、長野市の曹洞宗々務所から、講演を依頼された。その電話を受けた刹那、善光寺如来が私を招いていられるように感じた。それで直ちに応諾の返事をしました。当日、所定の時間よりかなり速く長野市に着き、講演会場に行く前に善光寺に

参詣した。その時、弥陀三尊と極楽のほんの一部を拝しました。その折の弥陀三尊は所謂の善光寺の三尊仏とは違っていた。後で聴いたのですが、善光寺の世に知られている三尊は前立ちの三尊の由、私の拝した三尊については、後に、善光寺の裏手にある無形活禅老師からの立証を得ました。同老師の立証というのは、長野の善光寺と表裏同轍の親縁関係にある甲府市の善光寺の弥陀を一度観て貰い度いという同寺住持からの依頼を受け、一週間、斎戒沐浴し、み仏の許しが出たので、幾重にもなっている扉をひらいて拝したその弥陀三尊が、私の拝んだ長野の善光寺様の御三尊と同一の態のものでありました。なお特に申したいことは、この日、善光寺の地下道巡りをなしたが、暗い地下道で、図らずも、大声で私の口をついて出た言葉があった。それは「光明徧照十方世界、念仏衆生摂取不捨」というのである。その時私はこれはどのような文句であるか、不明のまま、後になって調査したところ、「観無量寿経」の十三観法中、第九弥陀真身観中の金言であり、法然上人が臨終時に唱えられた語であることが判明しました。

弥陀の極楽浄土は、この娑婆と隣接していて最も往き易い浄土であるとされている。最も委細に渉って釈尊が浄土の様相を説き、且つ、往生を勧めていられます。しかし浄土は「易往無人」とされている。「阿弥陀経」に、少善根福徳の因縁にては往生不可能とある。ここに私は禅の日常行持の結びつくところがあると思うのです。のみならず、浄土は、化土と報土に分れ、化土に往生しても、報土には容易に往き難いし、又、報土にて最上に進むのは安易なことではない。つまり階次成仏というのが、正統浄土教の思想とされ得る。この点親鸞聖人の信仰とは幾分違うのですが、浄土は実に千差の区別がある。私が思うのに、その区別というのは、外的のものということよりは、往生人の利他心を含んだ心の浄化修練のことであろうとされねばならないのです。この世に生れて来て利他行をする、還相廻向をする、それに依って自らの霊格を高める、心の豊かさを増す。しかしかかる深くも亦広やかな心の領域は、そう簡単に高められるものでもなく、又、改まるものでもない。そこに阿弥陀仏の今現在説法の意味もあると受領されます。この点、浄土は、楽しむ為に往生を欣うものは往生できないとあるのは、成仏の為の修行の場であることを云っているものと考えられる。「大無量寿経」巻下に、この世にて、正心正意にて斎戒、清浄なることの一日一夜は、極楽世界にて百才の間の行善より優れているとある。ここに禅の綿蜜の行持の意義をみてゆく余地があると思い度い。親鸞の自然法爾と道元禅の身心脱落、それと仏教の無我の一致性の見方もあるが、私は特に上述の来世のところに、禅浄双修の意味をもみたいと云い度いのです。

次に大聖釈尊に移ります。上述の浄土は、釈尊の宣説紹介に依るところであり、読経も釈尊の説法というところに価値があるのであり、坐禅も釈尊の菩提樹下の坐禅による正覚という点に意義の発揮がある。釈尊のお勧めであるから阿弥陀仏が、そしてその浄土が生きて参ります。阿弥陀仏は報身、釈迦牟尼仏は応身、報応二身は一体である。弥陀・釈迦二尊一体に立って、釈迦如来を讃仰致し度く存じます。私は仮説として、私が釈尊から灌頂（出家得度の折の）、伝法（以心伝心）更に説法の場を見聞したと申したら、御一同様方は如何ようにお思いになるでしょうか。これは仮りにという話しです。私は釈尊のお霊骨をお祀りしてある仏舎利塔をお詣りした時の感動を、特に申し上げ度いと存じます。日本に現在、室内奉祀の仏舎利は別とし、戸外に別個に建立されているのは、八拾五ヶ所程ありますが、それらには全部真の釈尊の御霊骨が祀られているのではないようです。ただ真のご仏舎利の奉祀されている場合、その霊力（れいりょく）・霊波たるや実に感動の極みと云われねばなりません。仏陀の霊波は五体に感じて参ります。全心身に霊波を受けてみますと、釈迦牟尼仏の徳とその偉力は無限である測り知ることはできないという思いに打たれます。

わが国の世界的数学者、岡　潔博士が、第二の釈尊ともして讃仰された山崎弁栄上人は、お互いが修行して釈尊のようになるのには、実に四〇億年かかると、又十信から菩薩初地迄が三大阿僧祇劫中の第一阿僧祇劫を要するが、その初地に達した人は歴史上、インドの無著と竜樹の二尊者のみであると。このように宇井伯寿博士が申していられます。つまり、この点、釈尊は遙か彼方の大聖者ということになります。釈尊の御真骨といっても、胡麻粒位いの小片に過ぎません。その小粒の仏舎利が、非常な感動を与える。そのような場合、五体投地の礼拝をせずにはおれない、チベットで五体投地の礼拝をしながら、聖地に向うというのは、多分、彼地の聖者がそのように為したことが、信者一般の礼拝になったものと考えられます。

経済評論家の佐藤正忠（せいちゅう）氏はその『法華経に魅かれて』という書物の中で、次の如く云っている。「ブッダガヤの大塔でお祈りしておりましたら、確かにお釈迦さまの声で、正忠、不自由な体でよう来てくれたなと仰有ったんです。あれは確かにお釈迦さまの声でした」。「私はブル〳〵震えるような感動を覚えるのであった。それはまさしくお釈迦さまの声であった」。そして「日本に帰ったら、法を弘めてくれよと、釈尊は続けていわれた。私はもう涙で一杯であった」と。これについて、紀野一義氏は『法華経を読む』の著述の中で、「突然こんな不思議なことが起きるのだ、私は素晴らしいと思い、また、恐ろしいと思うのだ。佐藤さんにこの大きな変

化をもたらした要因は、過去の強烈な因縁であったかも知れぬ」と。

真の仏舎利の祀られていない仏舎利塔でも、釈尊の舎利の奉祀されているところであると思ってお詣りすればよいので、それは仏像にお詣りするのと同じことである。釈尊の仏像には仏舎利があるのではないが、釈迦如来としてお祀りするのと同じである。そのような仏舎利塔にお詣りする場合でも、釈尊は「待っていたぞ、よう来てくれた、わが精神ここに在り」と仰せられる。そして辞去するに当り、「又来いよ、待っているぞ」と申される。ジーンと暖かい如来の慈悲のぬくもりがこみ上げてくるのであった。

釈迦如来の仏舎利から受ける心身の偉大な霊動を通じ、かかる如来の徳こそ、洵に万徳円満釈迦如来と讃仰する。その通りであると感銘しない訳にはゆかない。このような如来の偉徳の拠って来るところは、と深思するのに、それは娑婆往来八千遍と云われる菩薩行の賜物と思量される。徳は利他行に依る、利他の行願を身を挺して果遂せられた生々世々の累徳によるものと感戴せられることである。

私は全国の仏舎利塔を、み跡を慕うて巡拝したことであるが、千葉の清澄山の仏舎利塔を礼拝している時、図らずも、一度も逢ったことのない日本山妙法寺の開闢者であり、山主であられた藤井日達上人、この時、上人は遷化していられたのであるが、この日達上人が、私の頭上遙か高いところ、天上界とも思われる所から、私に申された。「私は出来るだけ早く人間に生れて来て、仏法を弘めたいと念じています」と。その後、仙台市国見東山の仏舎利塔を参拝した折、同塔の傍にある日本山仙台道場にて、二宮上人に逢った。二宮上人は日達上人に侍していられた人であったが、私が、右の清澄山上にての日達上人の私への言辞を漏らすと、二宮上人は、それは日達上人が、常日頃、申していられた言でありましたと。かく申す私（光地）も又、日達上人の誓願を誓願として、生々世々、如来の弟子の末席に位する身分として、如来のみ教えを弘布し度い、仏法を少しなりとより広く世に弘め度いと念ずる次第であります。

（四）本学への希望　私が仏教学部長の時に、現在の本館並びに記念講堂等が新築されたのでしたが、その折、各学部長が建設委員であったのです。その時の本館の一二階の原案は、現在の如くではなく、事務所に充当するということでした。建設委員会でその原案に対して、当時の経済学部長の永田正臣教授が、欧米のミッションスクールではこのような所が礼拝堂になっている、本学がこの所を事務所とするということには強いて云って反対であるという意見発表がありました。私も直ちにその修正案に心から賛成、後、各学部長が北海道の岩見沢・苫小牧分校巡訪から帰校し、慰労会とも申す

べきものを開催、その折、本館の正面を以て、礼拝の対象の場所とするという意見統一を致したことでありました。烏滸がましいようですが、これが私の念願であり、それだけにこの推進力もかく申す私であったと云ってよいものと思われます。そしてこの申し合わせが実となったと云わねばなりません。私としては折角、礼拝堂のような態ちに設計変更をなしたことであるので、是非そこに仏像を奉安することの希望を堅持、大学当局に懇請、更に理事会に敢えて提案、縷縷説明これに努め、後、更に総長大久保道舟先生と懇談を遂げ、大久保総長の格段のご配慮にもより、現在の如き大乗の釈迦仏三尊の奉祀となった次第です。これで本学の中心に本学のシンボルが安置されることになったわけで、同慶の至りと存じて居ります。後、時に応じそれ迄の小講堂という名称の改正を学部長会その他でも漏らして居りましたが、時の若月正吾副学長も、同一意見でもあられたのですが、中央講堂と改名されたのは、当を得たこととして感謝もし満足もしているところです。

いうまでもなく禅の本領は即心是仏にある。分り易くして最も理解しにくいのが心である。仏を彼方に見ることなく心内に、心そのものに見るということは、理として充分是認されることである。しかし首肯しても、それを以て真に安心立命すること、これ程至難なことはないでありましょう。かの犬猫は礼拝しない、それは心にそのことを認めないからである、礼拝するのは、心が認容するからである。外的に礼拝するところに、内的に心の是仏が是仏として点火してくる。能所・主客が相即の関係にあって、本尊仏の礼拝の意義、が首肯されてくるのであるといわねばならない。

戦前旧制の時代、万と云わんまでも、せめて五千人の学生をと念じていたことからするならば、現在の本学はまことに今昔の感一入である。大学が大きくなればなる程、それに相応して、大学の基本精神の堅持発揚に意を須いねばならない、本学の発展とともに、この基本線が如何に強調されても強調され過ぎたということにはならない理である。平井・松本・岡部各仏教学部長先生の格段の配慮により、「祝禱法要・記念講話」が、大学の行事として定着していることは感謝に耐えません、是非盛大に存続するように念じます。最後に、私は決して優秀な教授であるとは自認していません。学生指導にも懇切を欠いていたことどもや、言動にも頗る欠点の多いことを自省、かかる私を長らく御世話下さった本学、そして教職員、殊に仏教学部の諸先生更に学生及び有縁の諸氏に心から厚く御礼を申して、本学を去ってゆくものであります。

（昭和六十三年二月一日、中央講堂にての講演に加筆）